



六
184

學東

雙蝶記 一名 霧籬離物語 卷之四

江戸

山東庵京傳編



九

薰脣ヨ花と見捨一胡蝶の狂乱

夫士松あさ餘吾郎ハ洛外の菜畠村トモニ延ニ隙アリ。草乃屋の憂節滋き栖をりて。独ソラノヤ一ダ夜の雪ヲトロ降。久シテ壁の筋アリ。寒風肌と斬ダドクれる。卧キ目もあらず。終夜東方行末のノゾムトよりひて夜とあり。鳥のかき後ろ北起あり。火打ソリて大と打。岡炉裏小柴と焼てあら居たるふ外の方に人のうらく声まことに。ソラノ氷つゝ戸をやうと引あけス。ふ雪を停止されど満地コトツつりて一面ヨ白妙とす。氷柱ヘ劍と逆

植ふるまゆりそ。又たまくと上へらんぬ。門首の雪とゆき分つ竹乃
編戸をちひき外の方と見ゆ。赤きひこ鹿子の小袖と見て黒髪と
乱一うち女房と見え雪よろび。うがふ伏てうらき居す。へきる人よ
やまとまくさざうつ。立寄て引起へる。是乃吾妻うきと。うき
けどとも驚き急ぎまどひて水上の雪と打もん冰きと息
えぐきと抱て裏ふ入醒葉とのまを焼火よ月とわくらうどく。
やく入らつて目さゆき。餘吾郎をりてこふと夢うとくのく
てとりまう。且ほま一涙よむせび。餘吾郎へ吾妻が背中とまう
てくらう。いふゆかふそ彼處少居つれでとさづらま。吾妻も
涙とおののく。雪責かたうとれりの始より。あやめ者をひへく
身の代の金千両と残一とき。貰ふかいく五条坂より此くらま、

走來ア。とてちまて行方をまどなり。縁手を詳ふ物語され。餘吾郎へ
まく耳聞て眉と頬真まくろ得がれ更ふ。そきの身の代と償ひなう。
何や多ふ奪げどくせや。又千両と大金と。まく奪ふ。我
門小もておれも不審なり。そも且何人の仕業うや。我も少一も
心當まか。まくハソふとく。吾妻も不審それぞ。妻も更小心當
もくべ。唯妻とおもかりの影なり。うきうき身の代と償て妻が難
義と救ひ出。起もむりき。せん君の住ゆ。此門首小もて
むれてゆれ。妻とおも身にまわせある。ゆき情の志ある人の仕業
うべ。されこれ身の代の金價きてれ我身えれ。せん君と夫婦
よるとも妨げ。今あくまて妻とくまくとくとく。餘吾郎りく
おままでのそきの深切五分えかり。それありてそきの妻よ

うぐ。これまでの歴史縁とあまへり。五条坂小坂へよ。かくく
れき者もゆかりのそとへ。吾妻いつと膝ともあくいそぐへを
くや。さて前々誓ひ一詞も云か虚そとぞ。此際より
ちのこままでぞ外ゆひかくち。女あるやえうべ。よのうのいば
なとてとくべのます。怖へや情きやと息巻きり。餘吾郎が
胸板とくへ右左小少動一泣叫ひ。餘吾郎ハトビヘキ。
いれわらとく。類のとんあくびとく。ちくぶ其いれひいふと
問詰ら。あけてほれぬ餘吾郎が胸の裏の苦一。何とひま乃
百合の花。うきく詞う。吾妻へ餘吾郎が体と見くいふく心
交せ。か疑う。もかよふぞ。まじく恨と泣悲と名。五条坂
坂て堂左清門が方へやへま心えられた。此こそ死小あくと寛悟と極

餘吾郎が傍かゆう一腰とくうて抜放し。吹ふてまんとく
見ゆ。是竹の力こそ

揣都此の切腹大繁體御子御
脚蹴死悔むれまトシ

と呑付てあくべり。かげて腰とくうて抜放し。吹ふてまんとく
自害とくでかり詰る誠心の默止ざれ。口外をすれどなれど
うちかく聞き。とくへ夫婦かきくとくよひ。原其竹刀と
起ゆ。不様くと彼常住金石塔料の金とつん果とくよ。南方
十字兵房我井から罪とくまで切腹一とく。旅宿と立退く此起
酒とくも。その始終枝葉も残じて物語錦金月影。山谷判官の家
臣きゆも此より始て詩う。吾妻へと聞て叔へ妻、養父と

おキ。君か仕ゆりん方こそお母へと打驚我オの人のゆき、つとふ
語りなれ。餘吾郎も彼の原同家中嶋元浩右衛門が養女として勤之
助と兄弟なると始て知。縁あきを千里と隔ても逢易く。縁あきを
面を對しても見えぬ。常言も今あると感歎。吾妻ふくらひ
いのうし。十字兵法どめとす。人さばり忠義の人々と非余は失ひ。
比目妻が死ぬ起立れど。づきうちれとの事よりも実理あり。さうす
今更妾心の誓と破。他又嫁と心す。けがとふと心とつむぎて
声と放ち声とたゞて泣叫なれ。餘吾郎も其心根と不便とかりて
波打ぐ。ゆゑく十字兵法と失ひて。まゐの身より起るゝ入りあぐ。

翠竟へ我放縛をやなき。さあま養父の急難と救ふと小舟と賣一と
かれ。一旦孝の道を立ぬ我をそしよひたと。不孝不仁の罪除。

十字兵法此行方の書あれども。とおゆふぞりふ。くろぐりと
居るぞ。うりあす。同家中嶋元氏の女とましくてあやまじ
てきりと小義理とて私。十字兵法靈魂小化言。此行方と媒入。よ
来て妻と。朝鳥の刀の行方とて杯買ひて。縁金と飯參と願ひ。
十字兵法家を立。彼が靈魂と慰をばきありとつむ。吾妻へこれとま
續生と。あくまで。とおゆふ餘吾郎立上アモ。仏壇
の扉と。うりあす。裏をとれ。及誓義劍信士。俗名南方十字兵法。永和
元年十月某日。呑付する白木の位牌をとめて。香花と手向懇々
祭る。侍す。吾妻へこれとしとて。念仏と。うく涙をとむ。ど。
餘吾郎へ手向の水と汲みて合掌。南無幽靈頓證仏果菩提
南無阿弥陀仏と。うく。同向の時をうつ。此下小ち

物語えきゆう。○さて吾妻も餘吾郎が妻も。よりきくしと
いへり。羅綺の重衣かくぢー昔ふたりて木曾の麻衣わきく。おへやう
とを川竹の憂さへしなけの秋の蝉声のあぐと慰う。手縫ひたゆひ前
垂の姿と今の大仕業心汚まぬ身をれ。鍋の数々庭竈阿弥陀仏の
誓みも。そくにて白粥の煙も下そく竹火箸。流一の水の燕鳥川
菜刀と研とふり小米粥桶の底抜て。あふんかん吹竹の飢不堪ざる
節もあどど。翠の帳紅の針の席と敷き。破屏風古夜を。
鴛鴦の食とひつきく。物うぬとひふすもありで日とむくをきる。
昔調よれ琴の音も。松風の時雨とも。鉢敲寒念佛の声も
水もく。世の人のかきかどれのふくら師走の月もく。胸敲星仏
賣の交加街上小年木積車の音えいをく一げなく。年浪がくをま

水ふへ柵もき。寒梅の花のうと曆の奥又卷納て。とぞふ此年も
暮ふう。明もと永和二年の春なり。餘吾郎始のうじ十字兵衛が残
むくる金の餘そ朝夕の烟と立しが坐して食べ山も崩坐して飲ば海も
乾の理なし。今へ残かく用尽し。こねう後といふて日とある。何よ
また活業とぞうじとおりうらふ程々弥生の比うら。や夏又近づき。
時の物とく夫婦ともふ。んト物の團扇の繪とく。絶の價と取ぬ。
此家のめぐへとびて畠うら。時一も菜の花の盛そ。朝夕黄金の色
目ふ見えども。ものがまえ一銭のうりもき。やうく其日くおほるの
なり。さて十字兵衛が命日ふくする日。餘吾郎手づく菜の花と折。此
花の色よ似て。金色の仏成りとみゆ。これと仮壇供ど。吾妻を
手向の水と茶椀を汲ててくぶとて取落一る。物ふあくと二ツよ

漆園春思

多歸夢

金谷花心

有異香

蝶乃花

ちづる

母子比

芭蕉

日影うか



りやくは在す庵うてすくても
れりとも蝶乃ゆゑふをひりす



破れをいつぶきたわやまらせ。その氣がよきよ。妻が汲み手向の水。冥途めいとかあると十字じよを拂ほぐ。心こころがあくねや多ふ。原我はらわより起おて非命ひめい死しる人ひとればさも理りありと。涙なみだうそくうそくりを餘あま吾ご郎ろうへ打笑うちわい。さをりのあやまくいつせんりをくくれど。氣きかかからく愚痴ぐちうりともふまで。さもあんうとひで再別さいべつの器う。汲くかえて手て向け。かくて餘あま吾ご郎ろうへ十字じよを拂ほが墓はか參さんをとてゆ去そよ。吾妻ごぜの夫めのうまきうまきをかくる。圓肩えんかんの繪ゑとく。さて時とき刻ときやうりうるふ。餘あま吾ご郎ろう鳥辺野とりべのより飯はんアム裏うち入いりんとぞ。家の傍そば竹敷たけしきの陰かげより武士士官か仕つかす奴僕ぬくわとおぎき者もの出来あく。窓まどの下すよ彷徨ぼうはうく。餘あま吾ご郎ろうひづきの裏うち入いりんとぞこれと窺くわひ居ゐ。とくもとく彼かれ者もの窓まどの下すよ咳せきとれど。吾妻ごぜの繪ゑとくとくと立たつ窓まどに顔おほとく。何なんかあんとくふ景けいき。或もへ點頭てんとう。或もく笑わらひとく。彼かれ者ものよハサはさく。

吾妻ごぜを再繪さいゑとくまで居ゐ。餘あま吾ご郎ろうへ此体このたいとくとく益ますりぶく。多おううきあきの頬ほと裏うち入いりん。吾妻ごぜをせひひ。おりへへくくむむきん飯はんのとやツつ。餘あま吾ご郎ろう常つねからず。登の飯はんとくとくまやまやびびと庵廚あんち。入いぬ餘あま吾ご郎ろう手てと又また物ものと頬ほと居ゐ。ちづくああと外ほか案内あんないと乞う者もの。餘あま吾ご郎ろう立たく編笠ひらきとくとく金鍔きんぱ白柄しらなの両刀りょうとうと帶たすき。衣服いきもきまく。偏笠へんりとく頬ほとれど。五条坂ごじょうざかにて見み知しる。斎尾賀さいお堂どう。おりへへくく富と武士士官の浪入なみりととかげに打扮はんぱんとれど。何なん人ひと小こややと用もちておおせせとく。おおれれ見み知しるのとく。初はじ對たい面おもてとれど。それともりと。何なんのよよううとく遠慮とんりとく。打通だつうとく。坐すかかく。身みやや不語ふご。一いつ。ゆくゆく來きつつ。別べつるるああん。和わ主ぬしを賣う。物ものと來きつつ。あありとく

錦の袋入へる。白鞘の刀と。これとくと見ゆ。餘吾郎
これと取あふ。抜て見ゆ。ありひかけぞ是十字兵法が賣代を
朝鳥の刀あつり。目小やと打えしく。アリ。其紋星乃
行かづく。其光波の溢あふ。水火蛟竜と断陸。車輶華を轉へま
金鉄の精せい。あづくわく。疑うなづく。あく。往來。此刀をいふて
せん君の手小へしや。堂左衛門どうざゑもん。頃日刀劍と商者の手てを
償めぐら得いた。是和主の買得いた。をきうど。刀をも。ソレも。きあを。おのき
り。もく。おりよき。價あさへ。いだ。やとり。もく。刀をも。や。ソレも。きあを。おのき
價あさへ。則金千両。かり。もく。餘吾郎よごろう。へあきれて。訝くわい。もく。ちが。あきて
つれ。たゞ。おのれ。もく。貪むら。者もの。殊更じゆじゆ。千両。もく。大金。とい。そ
との。アミタ。ゆく。其價の半と減へト。アリ。古鄉こくわ。へまし。

金とそのへ買いふ。それも急いそか。うづき。それを。もぐく。日との。ひ
く。堂左衛門どうざゑもん。萬金まんきん。から。此刀この。和主ごしゅ。古鄉
の飯はん。と。き。う。素千両の肉一錢ふきん。そも。不足ふそく。して。賣うぐ。り。
金をも。の。す。り。き。が。く。其價あさ。は。ある。き。物。や。そ。く。賣う。べ。き。か。り。得いた
思案しわん。せ。き。よ。く。餘吾郎よごろう。い。そ。く。の。れ。貧家ひんか。よ。い。そ。う。千両。よ。か。く。き
物。あ。く。ん。や。堂左衛門どうざゑもん。か。あ。う。も。活宝はくぼう。其宝。も。く。も。別。乃
と。そ。そ。く。某。又。浪なま。即坐そくざ。小。此。刀。と。与。び。と。く。餘吾郎よごろう。の。當惑とう
ち。ア。答。も。せ。ぎ。り。た。れ。堂左衛門どうざゑもん。彼。刀。と。袋。入。我。わ。あ。づ。く。れ。と
賣う。ん。と。お。り。ふ。く。あ。だ。和主ごしゅ。飯はん。泰たい。の。便。も。く。べき。か。れ。を。怪。と。り。り。
り。も。く。う。き。う。得心とくじん。か。夫。生。を。う。い。く。ぬ。に。と。の。く。立。お。ん。と。と

されど、庵厨の口小立ち様子と隠居する吾妻。いそゞへく走りて
堂左湯門と引止め。ひきぐもとまもえまわしに嬉々。今のみへりと彼處
をぞ死んだぞまじうぬ。妾夫をもみて其刀と買ふべれど。今一時まち
てよそゆ。堂左湯門頭をもていく。餘吾郎が体と見るを得心せ
ざる様子す。我ももて賣べきあらば。くつむ出でて序時もまちぎり。
他人小賣はうとひて又立上る。吾妻へきりりたゞか。何よりも皆
妾が胸をあらび。是と見かへして二枚の圓扇と取てさしあを。堂
左湯門取あげる。此圓扇の繪は童もしく知らん物多。別に
又意ありや。吾妻へも。今一時まちあらまん身斧琴と菊べ。若夫
得心せざる時へ鎌輪ぬと妾が心のもん物。合点せに目を
あく心あげふり。堂左湯門其意と悟る様子こそ打點頭。あくべ一時へ

猶豫をも。我此村末の酒店は待黄昏の比と限ま來べれど。それと
又黑白とまじかくべーと。詞とつけて曰く。此時傍の竹叢の裏より以前
の奴僕顔と。此方の様子と窺居る。吾妻へ餘吾郎が側よう。余が
ひととそりで何と思案へゆゞや。とく離別の証書と合て妾
へゆくじゆよ。餘吾郎へも。汝もアレ彼刀と買へと我と簾舎と
人手と渡して。我武士道の立だめや。殊更同家中備元氏の娘なまを。
我とく簾舎と飯奉るとも。次右湯門とあふ對一ツと何乃
頼あつて歸へゆきや。そりと刀と買ひまれば十字兵衛グ家とぞ。
そのゆゑか我と唯前程と。胸と割くをうみ苦くもりゆうとよ。吾妻へも。いかく
刀へ買ふと買へとそとおん身の心よまをも。

妾へ夫ニ管む。実ニ堂左海門主ニすらへてうるを。餘吾郎ハ
唯憤然て吾妻ガ顔としらまわり居たるが急百色変ニまく手してり。
最前うちの様子つづりべからず。そひ汝が心へ來へよ。吾妻いくのゆゑ
までもれいどへふも心變へず。ちのゆゑ多く察してても見るゆゑ。我身
五条坂より一一向る。綾錦と身ニまよ。口え美食ニ飽き未だ。
ちん身ふかれてより食きくじとす。本年の冬もとき衣の單そき夜
と五。馴ぬ手鍋の水仕業。春も越路と取らる。此ゆうがくはく
月の辛苦ふりる我姿。苔井よりそむ水鏡。昔の影もうなぞ。
彼ユツケ是と知りず。かくよみのうれしん者と慕。何不足うた堂左海門
内と嫌へ。妻が一生の誤。今後悔も多キ。ハシムトトロ彼人連
添く。偕老の未までもあくまでもせんとありたす。とりく離別の詔旨と

かきてよき。硯と紙とつき筆を。餘吾郎も怒の膳ひをわび。汝こそ
までの実心と打て變一其詞五条坂と誓。言も反古ふらる心
みや。返答せまとつたて。吾妻へ打笑。遊女の詞よりも多く善體
きるはろのうひなり。いつまでも實ありとおがくちた愚なる。我を恨む
理あるど。おん身の愚よりとあらゆる。去狀とく書てよと。べとゆきぎふ
ひんれ。餘吾郎へ大少怒とおばまや。畜生ふもおどりて。女今と
月と。うち全き此茶椀も。一旦破ると繼とあらじ。手向の水と覆す。夫婦
離別の前表も。覆水再器よし。脣手の此茶椀の破一斤
三行半。是が則去れぐ。是持て何方へきと出去と。吾妻ガ顔と
投げ。最前うち始終の様子と窺居。彼僕此時舌を吐

微笑して。余竹敷から戻入ぬ。折りも撞か。晚の鐘。胸もこころも
 黄昏時。紺セ一時刻と堂左清門戸。駕籠と雇て来。吾妻を
 いとまく。ゆかぬ。余吾郎。よも得心。そ。妻。いとまく。びとまく。
 連てといまく。余吾郎。と。堂左清門。み。打對ひ。心の腐。
 不貞の女。縁と断て。つれに。約束の刀。刀を。假せと。氣と。せけど。
 堂左清門を。おちつまく。あくべ。離縁状と。此刀と。右左小取。名べー
 より。餘吾郎。ひのき。行灯か火と。とり。本状と。きて。假。一札を。
 堂左清門も。餘吾郎。又。刀と。假。これで。さくらん。壇ある。やよ
 餘吾郎。よまを。も。されど。是。と。吾妻。指。を。ゆ。も。き。う。と。此方
 の。女房。いざり。と。ひて。吾妻。手。と。されど。餘吾郎。ハ。拳。と。あ。ざ。歯
 齒。一。怒の。涙。あくべ。落。う。吾妻。へ。顧。て。打笑未練。か男。と。嘲。つ。

懷紙と。投つけて戸。駕籠。小室うち。堂左清門へ立寄て。駕籠の
 垂と。撲地とかう。ハ。せげくと。下知。す。駕籠と。起。て。走。去。ね。
 餘吾郎。へ。き。や。怒。か。堪。ざ。り。一。嗚。呼。よ。く。そ。ひ。ら。ぐ。と。不。貞。の。女。を。追
 ひ。も。く。は。此。刀。の。手。入。へ。と。と。我。運。強。と。逃。り。一。と。ひ。く。り。ち
 ち。折。一。も。ゆ。竹。敷。の。裏。う。う。や。う。彼。僕。と。り。其。刀。と。と。う。き。と
 手。と。あ。く。る。早。足。と。起。て。瀧。倒。せ。起。上。ま。一。腰。と。拔。放。一。頬。額
 と。斬。つ。け。う。餘。吾。郎。ハ。彼。刀。の。鞘。を。丁。と。う。け。と。又。斬。つ。る。と。打。擣
 拍。子。と。鞘。ハ。底。散。て。拔。躬。の。鎧。彼。僕。が。鼻。頭。と。門。ヒ。シ。れ。た。敵。一
 ぐ。く。や。ざ。く。え。早。足。と。出。て。逃。去。ね。餘。吾。郎。ハ。持。て。拔。羽。と。一。眼。見。そ。
 ふ。く。り。ふ。と。驚。き。つ。灯。火。み。づ。づ。く。く。見。ま。先。刻。見。る。朝
 鳥。の。刀。か。あ。る。偽。物。う。れ。尻。居。と。倒。て。只。憫。然。す。と。う。が。れ。を。あ。

ありて吐息を。さて我と誰人と偽物と。一々。眞の刀と。そぞそそ
波せ。我今怒ふ。迫てあくさきりへ。不念す。こゝに心あり。吾妻が心
の妻へ。一朝一夕の支度あん。今まを。眞心と。おりなす。我と惑を
計。東うん。先刻今。の奴僕と窓越よ長へ。堂左房門。肉通と。ソ
サハ。疑う。ある時を。いま。枕へ。其心へ。共通す。下う
兼一。堂左房門と心と合せ。我と誰き偽の刀と。よ。人畜の淫婦にて
追去て。堂左房門。四段と。やもて。此憤と。ソシテ。裾端折く
かけぬ。いかく。我韋駄天の足。わうと。下と。時刻のびと。人よ行ふ
方角も。あれ。追去べきあて。おくりまんせ。まくに。彼。如き
人畜の女と。遊女の。虚言と。誠と。不実の。繰り。皆
皆是我誤。何面目。うだらぐ。穢り。此刀と。偽の刀と。投捨てて。

仏壇の下戸棚。ありて取出。一腰と。拔放。腹を出でて。やどく突
えんと。是乃十字兵衛。遺物の竹の刀あれ。我。狼狽。と
心つも。これと。タルベ

拙者。此度の切腹。死を。沙經。氣湯。抜ねられて。下

と書付。やまと。氣の張り。強まれて。がく。鳴呼。十字兵衛。忠義の
魂と。篭。も。此竹刀。死へ。後の後まも。不言へ。ても。づ
我と。諫。此唇置。ひひ。と。も。の。がく。更。あり。と。我命と。も。く
ざれ。此唇置。顔。う。と。か。ひ。か。り。て。竹刀と。押戴。自殺
と。と。十。字。兵。衛。位。牌。小。ひ。合。掌。と。我誤。と。化。と。く。
り。時。一。二。の。蝶。窓。裏。入。て。灯火。美。行燈の

うぐと起へ、二つの蝶りうとも不油皿あぶらびをせしら入ぬ。餘吾郎これを見て
いく。尔雅翼おほがくよくを聞か。菜の花蝶なづかの化けとぞう。蝶又菜種アキ乃油
大おほとあひて遂ついかの身みと焦あわと至いたる。是これりゆ。爾お出者でしや爾お
及くる理ことり。是これと玄夫堂左衛門くわんぶざゑもん淫婦いんふ吾妻ごさい不比ふへいそ。時ときハ爾我おれと誰だれ
我おれ又爾おれと誰だれべ。うぐ因果いんごうの丸行燈まわゆきとう豈其報くわんんや。彼我かれわれは
偽よの刀と与よへられべ。我おれ又偽よの狂人きょうじんとと彼等かれら行方ゆきととうぐ。
真まことの刀と取とりへて。我おれ本意ほんねいと遂ついべとひもうびらて。十字兵衛じゅうごひやが
位牌位ばいと竹刀たけとうと懷いだきかくー入いまぐる髪かみとゆきまぐらん。手向てむか一菜種イナシ
の花はなと把つか。うちかげて狂きょうひゆき。眞昼まひの如ごと夕月夜ゆづき小里こりの童わらわ
がこれとひうけて背後あくふつき。氣きうぐひよ泡は奈なよよ泡は奈なよよ。餘吾
郎おハ肩かたとひくと蝶と蝶との如ごと小こひく。これはとくと童わらわ等など蝶と蝶との菜

種たねの花はな小ちい狂きょう山さん吾妻ごさい我わと狂きょうへも。踊人おどりひと北きた嵯峨さが去いた。北きた嵯峨さが去いた。
北きた嵯峨さがの踊おどり花盆はなはなと争あらそと争あらそて。踊おどり振ふりうらまく。うらまくと云いて
菜な畠はたけと婚かちうらむ。狂きょうひ去いた。

(十) 白露や無分別むぶんぱく性せい命めいの貨物かもつ

安小又浴外おゆほか北岩倉きたいわくら小幻竹右衛門こげきざゑもん武士ぶしの浪人なにがしやうす。そぞまれる
洁業せきぎょうへかーとと何なに不足ふそく住居すみよの様子ようしょ見み越この松まつも世よ小こも神かみ。丸木
造つくりの門構もんこう庭にわの植籠亭えきののてい坐敷ざしき苔ひのきと賞養しょうようの手水鉢てみず鉢。水草みずくさ乃おもび
池水いけすいも清きよ濁なきよと目め少すくなあれぬ主おの心こころ。比ひへ毎月まいげつのととうるそうるそ。此家このや
仕つかす兩個ふたうの奴僕やつぱく石燈籠せきとうろうに火ひと燃やし。手水鉢てみず鉢の水汲くくととて。一いり
所ところ小集こしゆ奇き一箇いつの僕わづらわづら。其方そのかたへつつおおりり。世ようづうづとと此池このいけの四季しき
咲さくの葉は子こ花はな毎月上十五日まことに其花枯涸かくかつ下十五日まことにあしわの如ごと花咲はなさくて勢ぜい

す。それから主人も且那へ上十五日紫葵の花の凋時へ常の如く健小ち
されど下十五日紫葵の花咲時へ瘡の病をひきひきひいて外出りうる
病床又筆居よ。これも又稀有か病ふあらんやうに此方の奴僕が云ひ。や
れども猶めぐらしとて我等は傍輩彼新泰の露助が支彼へ迎
頃まで妻りうと此村を多め住。疫そりのつらぬをうなぐして其金え
き。貧乏で一處も居ゆる。何少くさん急小金の入支うて其金え
て命少くゆる。丈と夫婦が歎くとお且那が聞つけ露助が首を
五十両の貨物小取り。どちらの月がまことに首とまくらとを
お且那の心もとふるとき約束か。其まくるの月も今月が限だ。
今日ハ則晦日うれい月がまかれうるふわうんと女房がそれと苦みて
昨日お且那一日延の願小来す。つま我く置質物とす。

いふても流を支のう。貨物人の首と質物小取る。世ふうづじと支
う。と口轉へきて奴僕の癖きじから折りと障子の裏み嗽せ音と
て主人の声一そらきよ。あむ叫話と奴僕と。夜ふ入まで何口うてひま
よぞと下家へ退け。といふも彼方の障子に。やりまふ呵ふも烈言へ
主人の氣質奴僕とも打鬱いう人の声も口の裏下家の方へ退ぬかくて
時刻とやうう亥の刻の土圭ひきだ。亭坐敷の明障子と左右か聞き。
此家の主人竹右衛門瘦衰する姿と左結の鉢巻も病み悩む
筆居ふ。吳郡の綾の袖夏の風と厭ふ。後と圍金屏も四辺
耀一間の裏錦の小夜着と打懸て病床を机小向ひ歌書くと
くと傍ふ。あうう奴僕の露助頭ふ燃を蠟燭の流を熱さ窮屈さ實
燭淚の泣顔と敏そとて居う。竹右衛門書と讀みて露助が面を

又葉の露助苦しき堪えんとぞと身動ると燭燭が倒るぞと
又露助色ひそて物つをとて痘の悲さ指と以て掌ふとまゝ昼夜睡ぞ
とも仕まゝも心底かじと拙者あらわ頭と燭基あらわあゆへあまうとや情きみと
書て口あく指は仕方あらわば竹右衛門たけざえもんへこれと讀て白眼つけ情きみと
證言あうごん昏くもの文言と汝おなを忘おとと。今後まことにの手箱と探て一通と取出し。
今更ふやくそ讀聞よみをあらわす。忘おとくぶ再聞よみとそえと讀其文左の如ごと。

質物証文之事

一 捷者之活首一箇

右貴殿方一質入仕金五十両借用よひ所
明白也在五箇月と限受かか可か以若定の

月つきれりよ 捷者之首あしらひ取とり成なりと
違背たがいするなりよて証書あてしょ如ごと件

永和元年十月某日

北岩倉村きたいわくらむら 僱人くわいにん 露路助あらわ
相文あいぶん 関せき 児こ。

幻竹右衛門殿

竹右衛門ことを讀よいていも。此通の文言ことばされべ受うけ戻もどる
うち汝おのが首くびへ我物われものなし殊こと此月よ其そのまづらの五月ごつ日ひ今日けふハ乃の晦晦日ひ
ふて。今一時過すぎ子この刻とき小至ちればもや明日あさの分ぶんれを。眞ま實じへ流ながる
灯臺とうだい小至ちれもこ我心こころもことへ首くびと斬きとを違背たがいへき。

我心少そもだやすと呼て。再机小打向ひ餘念を書小夕され
て居る折りも一陳の風帆とあら一來て。庭木の梢と鶴ヒと
吹きし。池又盛の紫苑の花やんと動かひく。花の裏より
一道の陰火門ヒと燃出て此方へ飛来アリ。忽一羽の子規と化て
机上又羽振。二声三声のふーは鳴ハシ。竹右衛門のそばに
露助小對ひたゞん何が出来やうと。どうぞ此方どうぞと見まがく
と。ふ間ふとくろ背後の方み。緑の髪どう乱一色青ざる
す。女の幽靈。髪髪とあられ出。竹右衛門と外皆小けでさも
うらやうひか。顔色あはせ。強氣の竹右衛門急ましく瘡病胸
とおきて苦しむ体。露助へあが怪一やとぞひつ。彼方と見んとふり
むけた。竹右衛門のひどく。又此方とぞ。汝が首ハ我物なれど汝が
紙ふおとこひーと。假字と呑ひよう。露助へ志のびく。我と忘
れて。死ゆ。相子小頭の蠅燭撲地。時鳥ハ又再一團の陰火と
落する蠅燭のいま消す。取手燭小立て机小と置露助襟首
つゝて膝りと近く引ひて声とあらげ。やされ惡を奴か。五十
両の金きくてハ一命小魯るより危急と救ひつり。うち思を

ト自由ヨ。動くと支ハきりどとぞ。しむか夕と前程より制もと
汝へ聞ぬと呵られて。向もしむれぬつうつけ。猪首小きりて坐一居
うち。板竹右衛門へ幽靈小打む。慘望と滅して成仏せよと
ひふ。まき逃れて出ゆ。立去退とよがく。刀と抜て斬払へ。一
幽靈へ消失て。時鳥の明障子小垂つま。口もう血と吐出一て障子の
紙ふおとこひーと。假字と呑ひよう。露助へ志のびく。我と忘
れて。死ゆ。相子小頭の蠅燭撲地。時鳥ハ又再一團の陰火と
落する蠅燭のいま消す。取手燭小立て机小と置露助襟首
つゝて膝りと近く引ひて声とあらげ。やされ惡を奴か。五十
両の金きくてハ一命小魯るより危急と救ひつり。うち思を



忘れ。証書の文言ふとひて。我詞と背く横道者と四言て。
 病め屈身。強氣の主人手速用意の繩と把て。露助と高手手
 手ふく一上様より下へ落し。露助は外皆ひたあけ
 怒れる体のゆゑど顔ふわうなり。竹右衛門はさう白眼み。貨物
 小繩とかく人世間のきよと知るや。今もぞみ子の刻の土圭ひ
 りべ。汝が首の貨物ハもや流す。我曾銚刀んとあり。新羽の
 刀か。幸ひ汝が首と打放して刀の斬味を試べ。やまと奴僕等
 土壇をつけとよどき。ハツと答て奴僕等土俵と持出て。露助
 が前小積重様まじふ燭臺と立たきて下家まじて入あ。

晦日も月と耀り。此時外の方ひそやくふるび足て機糸物を
 引來。門外小毛衣置て從者へ残らば取まう。是何人歟

ごとくさて竹右衛門へ白鞘の刀と隼へ庭下馱もれてあぐと
 庭ふと立露助が側近く奇。此刀と鉗ふへ究竟う。汝の骨組
 もくと打點頭。手水鉢の水と柄ぬみ汲もうて刀み灑ば露助ハ
 つるびなるけときも刃せど。坐とも直して覚悟の体。刀はい多斬物
 知れど。病氣の手の裏で我骨えらうもがつて。口ふりもひど
 目顔を。されと悟らと嘲笑ひ悪ともふくと竹右衛門をみ
 たまて。刀み手とからず。危き折一もあれ。やよもくまちてよ。さう
 視こむ露助。妻の於関藁をと袖ふくと。夫もくとて竹右衛門
 行ひ。昨日は參りてまもん上姿。身と賣て金とくつゆる
 まを。今もく一日と延てゆられと願ひとぞ。聞入うるへ始る。
 鉢物ももあんとあん心をすまう。あくさんと始まる。かど

得心ひきせんかねど。さうかく活首と質入りの証書と出せり。今更悔てくふこと是非銚子だくふもとく。妻が身を斬刻夫の命とすけてよ。慈悲ぞ情ぞくまじしと。掌と合せくらかりじ。竹右衛門へ間入ぞ。女へくまの用ふくまぬ。妨をか退て居よと。靴ふてくまく突退て。又露助み立むべし。いなくまのまとも夫へ姫が殺さむと。右かくまづき左ふまき。踏てくまくまに夫とくま。袖尻風立つ屈つ青柳の風にりくま乱髪。くまゆる目も不便き。露助へくまとくまて。かくま慈悲。くま竹右衛門へふりとくま間入キド。益なまくま詞くまやくまくまと目顔で悟らば。症くまく斬くまれも目顔で寛くま悟の体くまうらふとくま竹右衛門又立むると於開へくま隔つ

相子み竹右衛門が左りの手頭と見て驚き。ヤア此小指さゆびごとくあ。とくと聞て露助へ何小指さゆびがきれてあると。我と忘れてあり。竹右衛門へこれと聞き。汝ハリウチの症おう。我と誰大膽者觀念せよと刀と抜首落おちと斬つる。露助もやく身とく。一声きげて力ときらめ。いまの繩くらと断土俵を把て受うけあらう。刀へましりの土俵と斜み切きかく。土へ地上ふ散乱を時々不思議や許ゆる。蛙声かわいうそく鳴み。竹右衛門へそぞくく刀とちくらてあり。露助へ顧て竹右衛門何ゆゑふ猶豫やうす。くく斬と多^シ髪がをあげたとぞりよされば。竹右衛門へ刀と袖そでかく。かく頭かぶを下りて斬くくもかく。

よ詐くわいのかとつを吟ぎざれど。かのじくいだ表ひょうふくらむ衆物しゆぶつに裏うらみ

声ありて

盗人と捕つて刃を我子す

と声をやふ吟をれを。竹右衛門の眉と鬚と字と二つを斬る。
表ふ人より文字。今表ふ人ありて。我々が附身の當意即妙。何人のや
事とよと。さくらのれを。猶衆物か声ありて。不審ひじきりそれへ
通て對面をべーと。ひくと衆物の戸とそとくと立て立出へ。五十歳計
の老女も。女うれども両刀と帶へ。武家の行儀也。摺落の給の衣み唐
錦の帶も正く首桶と小脇を抱てまく。打通れ。竹右衛門へ一眼見ゆ
大い驚き。母入みりをやせりへり。おん入來へふと我相とあむ
ウリやとなずづる。席とねひて上坐ふ通らしれど。老女の怒の声ある
へ。我を母めしとぞう穢くまと。他の吏へつもぬとうむるをそくと

怒の疾とおとゝろ。露助へせたふせまふ。面色も。妻於闇小駿眼
とれをこゝとぞ。サ一持る藁苞の裏へ。両刀と取出へ。一腰へ
夫少渡へ。一腰へおのれ小脇を。夫婦りくと。竹右衛門。右左
小立す。さう打けて且露助ひき。夫土へ金鉄の精と育と。多
名劍土中ふ入を。其精天か徹と。傳聞蛙鳴丸と。名劍鉄精
と育と。土と軒と。迫アテ蛙の声と發する。汝今土俵を斬
刀こそ。蛙鳴丸ふ疑う。其刀と所持する汝へ去年五月下旬鎌倉
月影ヶ谷の下館の後門を。都とよ白拍子と手ふけ逃れ去
曲者ふ疑う。其時我其處ふ行か。前より流とせたとく。土俵を
し。汝ノ刀と受あつ。今之如く土と斬忽蛙の声と發を。こそハ傳へ聞
蛙鳴丸と推量せ。其夜の様子へ汝が心ふがえあらんと

ソヘ。於闇も其尾ふつまそソヘタ。あうのまくと都が死骸をあくる
刃を口の裏ふ小指と合。今汝が左りの手頭と見るふ小指也。彼と
ソヘ是もく。都と害せハ汝す。莫明白也。露助又ソヘタ。ソヘ
我ハ都が為ふ弟ナリ。前程の怪一ももまく。姫の七靈也。時鳥
血を吐明障子ふおとくらへと書るも。姫の怨魂冥途の鳥と
き。汝と打トと我と此不道するも疑。蛙鳴たと所持する
者こそ姫の敵也とおもひ。其時螢の光にてのうふる汝が百体
りやそれとおりハトキタ。ソヘテ痘トキ。五十両の金の入用ありと
ソヘて試つよ。我活首と質物ふうんとソモソヤれる。其詞も
あうみて金と借ト。此家ふへこそう不実否と云せよ。汝が首を
此方へ受取姫の仇と報んぬ。素入用うれ金され封の便此よ

あり。此金と灰もくへ露をうり。恩ハナヒ。ソヘテ懷中金の包と
取出して竹右衛門が前ふき。日来尋一姫の敵如此明白也。
ソヘ立合て勝負と決せよ。ソヘて刀の財銭とあ。於闇ソヘも
諸寄。時ふ彼老女夫婦小向ひやまをそそぐてあ。そん
其方まく都が所縁の者カラ。勝負と急へ。ソヘど此方ふも別々
又食義そく夏あれた。ちびーの間ひくへ居よとこら置懷中
より印籠と取出して竹右衛門が目前ふ出。汝此品かわげある。
去年都が殺れ。同日同夜下館の軍用金千両と奪取。其盜
賊一重の塙と切破て出る様子。我其處へ行くも。拾ひ取る
此印籠。沃地不遠山の時繪一もく。ソヘて汝が所持の品かわ
うだ人として聞く。汝千両も五条坂の遊君と身受せよと

よは彼とひ是より。彼金の盜賊へ汝うる更明白き。それを都々見
こがれて手ふけろ小疑す。我君うちの金の盜賊うるがふ都と害
せー者と余義せよと。夫庄司じぶふ余せんら其役をく委せし
りえ。夫みうちて鎌倉と旅立汝行方と探りゆやう。此柄ふ今日
尋當アリも。人手ふけビ此母ガ手づる汝が首と打て。父御乃耻を
さうがやと。それゆ多ふ此首桶現在この此母ガ此役アリと云
望て我子の首と打ふ。鎌倉より多く尋て来つる心の裏の
アリありふとおりふぞ。転うもあり転たもアリと。難久又附くる
我一ヶ。盗人と捕つて又れを我子アリと。我思より自然と出る
十七文字。此母ハ盜せよと産つゝを。渴ても盜泉の水と飲む。
熱生れども惡木の陰の息ども教戒と。知ね汝不ゆざれども

ううぞ天魔の刃入一うんある悪や。不忠者不孝み女と云マ老乃
手弱腕みて襟首うて捻倒し。扇と把て打擣。怒の涙悔ニ泣
身とりてぞ倒れる。露助へタ不詰寄て。妹都と殺せんうる
恨あくと解せん。老母の今物語と聞いて合點かぬ積み
する罪料も。此方の恨ハ妹の仇。立ひ立ひぐくと。夫婦ゆくと
もげれん。言老女のうび声れて。やま待を。彼がロアリ盜賊あり
ちゆう。白狀と聞ゆくと。其方等ハ仇打の勝負をうまぐ。首ハ妻ゲ
受くと後。主人うちたまうたる此首桶のむすりつて此方の役を
きまぬ。りぞ兒子白狀せよと。詞の責具竹右衛門へ最前
より。唯手と又き頭と低不言して居うち。やうくと顔あけ。
毋人さみか聞ゆル。夫婦の者も我りよと心とあくと聞くと

坐さとあらわし威儀けいぎと敬けいひつひき。我本心もとこころをあまびて夫婦ふうふの都みやこは打うちれをやめへ。が母人のもん疑もんぎとそくにる餘儀よぎあく実じつを語かたう。若殿王免君わたくしむちゆめぐみ自じ相子都あいだいが艶色えんしきと迷まよひゆ。放佚ほういつ無慾むぜつのもん行跡こうせき親人しんじんと始館はじやかん中の老臣ろうじんうるぐ詞ことばを尽つく一理ひとりとまづらめて諫言けんげんと奉まつどあん聞入きこ。惡行益よくぎょうよくつづく。家いえの滅めつ七しち坐ざしと。諸臣しょしんうな薄冰はくひやと履はき如ごとくありうありうけあり。我浪人わらわの身みと幸さいに西施さいしと莫湖ばくこ小沈楊貴妃こくじやうきと馬嵬ばくばい小殺こころせ例たとひ。主君しゅきん放逐ほうしょくの病根びやうと絶塵ぜつじんとありつゝ。非ひきん者しゃと手てふくらん情きき。殺ころみあらびどとくじ。家いえの滅めつ七しち大弊だいひの歎かなみへくられどと心こころを決きず。去年きさきの五月ごつ鎌倉かまくらふくろ。下館しもだてのりびと徘徊はいはいせ。折おり續つづく五月ごつ雨あめももす。晴間せいまふ棟むねの陰かげ身みとひそめて居ゐす。所ところふ黒裝束くろそうぞくのあらびの者しゃ館やかたの堀堀と切き破はて出です。

ゆゑ。曲者まことと呼よぶふ。小柄こぼうの小刀ことう手て裏うら剣けんと打うちつりて。跡あとととまを逃のがれ去はなぬ。程ほどきかの都乘物とよものと出来あつた。従者ともだと追散おひき。都みやこと對たいて不言ふこと。心こころの裏うらよおりひき。後日ごとくお汝お汝が所縁しょ縁ととが。此身このみを打うちれて修羅しゆらの苦患くさんと救すくべと誓ちかひととてとどらの刀とてととてし。彼苦痛かれくつう又堪いたへりや。我わ小指こしづと食く切きぬ時とき。燕子花えんしざくらのやうの色いろと紅べにみ染しみうえう。都みやこが怨魂怨まご薦すす子花えんしざくら小をまし。彼花かれの裏うら一團いつだんの陰花いんざくら燃の出だ。都みやこが胸むねりき。一羽ひとはの時鳥飛とりて。のる。鳴去ながな。其時そのとき行ゆひ。族人ぞくじんへ我わ推量すいりょう。露あめ助すけ汝なもあらむ。我都まちと手てふく。後此庭こちの四季しふせ咲さくの薦すす子花えんしざくら毎月上十五じゅうご花枯かが凋だ。下十五じゅうご花咲さくて。我又上十五じゅうご常じょうの如ごとく。かれど。下十五じゅうご痘あざ病びやうとまづく。夜よく都みやこが亡な靈れい來くア。そ我わと惱うなづ。

也。寢食ともふうべて。如此瘦衰。活きず。餓鬼道の苦とうる。
な。彼罪きして又ふり死へし。うまぬもんべとくへ。一日もを
彼所縁の者ふ打きて恨とす。成仏とさせやと。所縁の者と尋る
うち露助汝が画体都がおもぎふ似うる多。や都が血をちの者かと
心と付へ。金をうて命をうる吏あうと。夫婦歎くより吏とよが。
されふ就て実否と探す。試ひやとありつま。活首と貨入せを。金をか
づくらんと。わざと難題とひかへ。速ふちとびとくへゆゑ。そとを
ぞれりと知。無分別き。置所露と字の露助。露の金の質物
も。我ハ風雅のより物。まと情きりらへて。燈臺とく辱うて。側
近くつり。怒と起を。其実と探んとあら。又新郎の刀と偽りて。蛙鳴
たの奇特と見。汝が我と疑ひ。汝が素姓ともうんとあはせることある。

今日時りうて恨ととく。一葉子花の所縁の色の汝等の素性を
知も。正是都是都がもびく所あし。昔輕大臣遣唐使と渡る。一
支那の人不言薬と飲あひて癌とく。身と彩畫頭と燈臺を
戴りて火と燃。これと名て燈臺鬼とく。其子弼宰相支那と
往て父と尋ねとく。姿變されば面と並て知ぢら。燈臺鬼
涙と流。指頭と食切血と出。と詩と書。これによりて其父を
吏と知りとく。汝癌とく。我とわざく。我汝と燈臺とく。
時鳥血と吐かとく。文字と書いて娘の靈とこととあ
あむ。都是輕の大巨灯臺鬼の昔語よく似。汝をより承と
告。汝の敵と打んとおり下郎小似。懲心義心感ぜ
ス。あまう。母陽のうふと謂はゆの通。其夜母人小ゆれ

あひーとふ露ちく。我幼年の時より持て見る所あり。此印筆
其所の落あり一ゆゑふ軍用金と奪ひても拙者業きしんと
せん疑へ無理あり。拙者が詞露計も虚言を証拠とま
す。此小柄の小刀ふひとぞテ出しぬ

(土) 紫の蝶もありたり池辺の盜人

當時老母小柄の小刀とうけどアソク見そりひなよ。是ハこれ放駄乃
色繪の彫物細工の妙ものとゆき。其盜賊が此小刀と手裏剣
み打ちと。さりよ更もあらまじを少くあふれども。さやど忠義とむりふ
者ガ千両ともよ大金と出。五条坂の阿曾比吾妻とよしんと受
けサヘいきるやゑぞ。奪ひて軍用金の千両と。阿曾比とお詣の
千両と。符合もるふ疑あり。浪人の舟を以て千両ともよ大金と

ハクホト貯へど又汝十六年以前剃髪の望のぼ登置と残て出奔
する者とゆりて。今小剃髪もとど。活業もとた浪人ふ似合ぞ
きくき家宅の結構衣服調度又養麗と尽そ。これ以て
ソボリし。これふも返答ありやうと。其事不審ハ實じ。遊君吾
妻と身受ヤーベ謂あり。元來拙者ガ初一念とつひとふ語て聞セ
ム。かづれ十六年以前出奔。意趣とよど。よて母人乃
ちん詞ふ。我原壁女の時汝と産まれ。汝ハ縦領されども妾腹す。
餘吾郎ハ弟うれども本妻の産ゆべ子あり。我ハ本妻の遺言又
よりて後妻と。其恩甚深し。必餘吾郎と麓略ふもとある
とのさまへ更も。原父へ養子そ。餘吾郎が實母ハ山咲の
家の娘。す。実ふ家の血もだよへ餘吾郎す。これよしよ

おのれ父おやぢ人ひとがまし。家督けだくへ餘吾郎よごらう又讓ゆずり。拙者わざわざ別家べつけをもとれ
と願ねがひえども總領そうりょうとちき次男おとね小家こけと續つづき理りやあ。これ頤義ぎいぎ
よあうばとのままでうりくもとへざう一いつを。やむことふ得えを出奔あはなで。い
餘吾郎よごらう小家督こけだくとくとくしたやゑふは。ちう一いつと如そく拙者わざわざ幼年おさな
歌学かがくと好すみゆゑ。家いえと出て後あとまや墨雪ぼくせつの功ごと積たまて古今傳受こきんてんじゅ
と相續あわされ。歌学かがくと教うて世よと過すぎを半着はんじやく。貴人富家きみふく小も兄弟子多おとうひにわざわざ
それや久ひもうづ不足ふそく。あるふ餘吾郎よごらう五条坂ごじょうざかの吾妻よしづめとよ阿曾あかぞ
比ひよ相馴あわされて。づひ不行いか方ほうもれどありつる。然則ぜんそくへ我存念わがすねも水
の泡家あわせと續つづべき子こうくて。出奔あはなちうる我わたくしもと。うりて不孝ふこう
よき。道理どうりあれど。且餘吾郎よごらうう行ゆき方ほうと尋さぶやと。五条坂ごじょうざかよ
到いたて聞き一いつに。其在所あらわと知者ししゃあうてど。吾妻よしづめへ餘吾郎よごらうと慕まうて

ゆトの長おさなの意きみ背そむき。雪責ゆきせきみせられて命いのちもあやうあやうと聞き。矣。
若吾妻よしづめ餘吾郎よごらうが爲なふあくあく死死とああして。餘吾郎よごらう罪ざいを増ます
道みち理りと存のト。おのれあやしけあやしけ姿すがみ打扮ばんぱんて。富士屋ふじやの後園ごえん
去よのび入い。身代みしろ千兩せんりょうと殘のこ一いつも。吾妻よしづめと奪だつ出だつ。餘吾郎よごらうが
栖すまの門外もんがい小捨こし置おきて取とり。翌日よの又五條坂ごじょうざか小到ことう彼長かれ小對おう回まわ。
吾妻よしづめ年季ねんきの証あて唇くちびると取戻とりもどし。表向おもむき彼かれと身受みうけりて。ハ
餘吾郎よごらうが放ほ埒ら々々世よ小廣ひろく聞きえ。取戻とりもどし参さんの妨さなげみなるべーと
傳授せんじゆといつて。餘吾郎よごらうが爲なふあくあく死死。其身代みしろ千兩せんりょうも。一富家いふけ又古今こきん
拙者わざわざ本名ほんめいとやうへへ。餘吾郎よごらうが名なとやくやくいやす。今五條坂ごじょうざかの
小歌こゑ。吾妻よしづめうけだと山咲さんざい餘字よじ兵衛へやとよふと聞き。唯い此このへ

餘吾郎の一功と立させ。飯黍とを父の心とやむが願ひて少へ母入る
此儀と称ぐ奉ると。心底とくろぐく物語られ。母へ感涙ともと
つ。今へ疑れども。義理ある子の餘吾郎の家と續せたく
ありふへ我を又称ての願ひ。いとぞも母子ともみ心の合へず不
思議うりと心とける物語と。聞て驚く露助が下りて手と
つゝ。そくわきく餘吾郎のむん兄君みてゆうとつゝ竹右衛門
うち點頭いふもさう。幻竹右衛門とよへ後の変名。實の名は山咲
餘字兵衛。これふあくと我實母淀瀬どもとゆもす。長物語ア
時刻うぬ。夫婦りとも我と打て都み手向よ。さく打と
覺悟の体露助ハ頭と低今のおん物語とうけよまんれど。娘都を
手ふ懸々。原忠義や多ふうまく一更ふりへ恨むべき理ア。

殊更主人ふ又向劍のあぐきやとりへ。餘字兵衛アリ。何とよ
我とよて今更ふ主人とゆへ何や多。汝かふ我奴僕とくりづ
トモ。それハ原仇と報ん爲の計畧されば我ハ主人ふ似て主人ゆ
ぞ。露助いも。其浦不審ハ理ア。拙者去秋妙の敵と尋る。あ
鎌倉よ下ア。おん父山咲庄司の僕とす。名と路平とよア。
更のむすれを。雨といふ字の笠と着て。露助と名とあら。あ
此村末ふうう住ぬ。去年十月されする。おん母君の命ふより。餘吾郎
君の安否と聞く。京都へ飛脚よ参ー。侍女裏の取次
ふて。拙者ハ新参との奴僕の身されど。おん母君のむん顔と
見奉りし。古もく。拙者ダ面へうれ更ふおん見知あきびうど。

總の間のゆく。先父君おとしが仕つて拙者あやうを。餘字兵衛ごゑ。則そんじ傍主人そばのすけも更ことと最前まへよりの無禮むれいの儀ぎと。ひとく免めん。あれと。身みと轉ひてぬづけ。餘字兵衛ごゑ打驚うちもどき。ありと。父ちち仕つて一者ひとわ。我わと打うともいひぐ。所緣ゆゑの者もの不打うち。都と誓ちか。言ことと遂と終し。彼恨かれと。もま。いうふと。思案おもんの体からだ於お関せきへ竦おどヒ。とみ出ひだる。唯いは今乃いま。其小柄妾おとこね一目ひとめ。刀とそよと。ひつてこれと乞取こなうて。と見とみ。いと驚おどろするおりおりちち。是放駒はなこの色繪いろゑの彫物くわもの裏うらふ二見ふたみの二字ふたじと鑄うつ。是これ妾わらわ目めもがる。物ものと。兄あ鰯松いわしへ。所持おもいの小柄おとこね。疑うなづ。さて。彼かれ千両せんりょうの賊賊へ妾わらわ兄あのそくぐ。一とひて。虹にじのやうす。息いきとつき。面目おもてうけふうむけ。露助るすけもうう驚おどろ。何なんと

又其小柄おとこねへ汝おまが兄あの所持おもいの物ものも。とく其跡そのあとと物ものざれといそ。それべ。於お関せき。今ま連つづく身みも。妾わらわ素性そじやうと語ごらざれ。知しくま。父ちち伊勢いせ國くにの樂人がくじん也。二見太夫ふたみたぶ。是これと。母め田たへ於お破矢はきとまくせ。母め十五じゅうご歳さいの時とき。男子ごじやうと産幼名うぶなと。鰯松いわしへ。とり。其後連つづて女子じょし二人ふたみと産。其一人ひとへ妾わらわて。今一人ひとへ則まわらわ。妾わらわ妹幼名うぶなと。小蝶こてつと。二ふたと。幼時うぶじ。とくに他家ほか去ゆ兄あの。家いえふあり。一いつ。兄あへ身み持もつり。勘當かんとうと。うりて行方ゆきかた。もれど其後父ちち。七しち人の数すう。入い母め。妹めの小蝶こてつと連つづ子こ。と。鎌倉かまくら小動こどうの駕籠こしや。乃の塵ほこり兵衛ごゑと。又人ひとの再縁さいえんと。ある。七年七年以前まへ。其塵ほこり兵衛ごゑと。人ひと旅人りょじんの忘わ。金きんと。あらわし。望まく。其夜よ盗人とうじん。其金きんと奪だつれて。分わかれ。説わざ。其急難あきがたと。救すく。妹め小蝶こてつへ手て越この里さと。小身こみと責め。後あと小

五条坂へ賣りてゐる。彼富士屋の吾妻もとす。則妹の小蝶
なり。去年もん身鎌倉小奉公の留主の間朝夕の手着にあ
で歌占とたりひに五条坂ふやきて。うじて妹吾妻ふあひ委更を
聞ぐる。兄の行方へ今ふあれども此小柄へ父の秘藏や。物
少て。父存生の時兄を譲りと聞バ。兄うで持べし物にうご故小
彼盜賊へ兄にきまうひと語られ。露助へこれを聞。今ゆゑを
汝ふいとつも。夫婦の縁はんまをう。其ゆゑハ賊人の妹を
妻ふ持て。盗泉の水とよもか飲白波の立田の山よ共か入て。ぢり
まの名と汚とおしまをなう。必我と恨みもくば。於闇ハ済と流
もうのまゝ無理ううぶ。悪人と兄ふ持一ヶ我身のあと宿世されば。
いをうせん身と恨むとひ終て。一腰と抜放ら。うじく自害と見え

多。前程より門外小彷徨て様子と窺一箇の武士。やまとやまと
あそびまとと声うけて走り入於闇。自害の手とくむ。於闇ハいざ
此人の顔とく見え。そのふ見むげえ。顔うりとく。うち點頭さぞ
わん今更名告も面目う。といひもとてど。カと拔て。腹かき出
突立れを。皆くこそもいふとひて驚き。彼武士へいと苦げよ
息とつき。餘字兵衛ども傍親子へ更う。露助ふも對面もく
今がちづ。拙者へ則これ。女の兄前の名ハ二見鰐松。今の名ハ
鮫尾賀堂左衛門とよき者。我富士屋の吾妻ふ執心深く。今餘吾
郎。妻とくしと嫉おり。朝鳥の刀と買取。これと媒鳥もうて
吾妻としき。餘吾郎と詠き。傳の刀と与て。去状と取吾妻を
賺一出して我隠家小連坂へ。吾妻が我ふ靡る体と見せ。



刀と手ふ入ん為の計乎。我小油断とを。眞の朝鳥の刀と去状と
奪て逃出一ゆゑ。まとく嫉怒ふせまう。餘吾郎りゆくも打捨し。
彼所へ急ぐ道を。此處と過しに。此小吾妻が嘆あれを。何支ふや
と彷徨て委細と聞うち。妹於闇が自害の様子と刃下ふものひど
き。それかつまで我身の懺悔せん聞あれ。我志わく。父乃
勘當と受其後漸ヒ小零落して遂ふ野ぶせうの七食となり。鎌倉と
徘徊せ。小動の駕籠の塵兵衛とく者旅人の忘一財布の
金とわく。より居たり。塙のひまうり窺見て。其夜塵兵衛之家は
ふのば入其金と奪ひ出んと。十四歳をうき娘の寐顔せら
く。まふをなくさんと。頻小嬢媛の心と動一残景く逃出しが。彼
奪ふ。金七十両ふて衣服腰刀どその都ふのびりてあぐく彼地を

徘徊せ。偶五条坂ふ到阿曾比等のゆたうひと見物せ。其
うちふかの塵兵衛が娘あり。前小比れをき。十分の養色を。う
其名と聞べ富士屋の吾妻と。彼阿曾比とあれぞ。我望みを
そぐふ。小安一と喜く。ひるひて富士屋小到。吾妻と揚てまみえ
くとを望度々かきくどくと。彼我と。吾妻と楊てまみえ
まんを。まもく心をうやす。何不まれ金おき。と。ハと。懲念增長
あり。再又鎌倉み下。月影今谷の軍用金千両と奪取。盜賊。
其放駄の小柄のぬへ。則是拙者也。其後我吾妻が為の金銀
と瓦石の如くを。も免角靡ざれ。を寧かれ。身と贋出。小屋を
おりひかの千金と用んと。あり。雪の夜行方。もれぞ。今門
外。もとて此妹が物語と聞べ。かの塵兵衛が娘ハ。我妹の小蝶也。我がの

金と奪へゆ多尔。其金のうり身と賣て。吾妻とよ阿曾比と見
物語夫とく知ど我へ又其金と吾妻が為ふつみ捨へも。皆是惡の報
きん。志みるに塵兵衛と現在母の後夫とちくば母にも面を
合ひし。彼所小居と露あり。妹小蝶へ幼時他へつゝかまつる
ゆゑ。素なが小顔と見えし。ちくねこゝそりひき。同胞の妹を慕
慕種々臭悪をきし。豈天罰とす。かく我とひ嫌一夜の
枕もゆるまらず。今かく人せられて我幸ひ少て。畜生道ふぢりゆこと
脱とりゆだ因果の不孝の罪の火化車。それ引うえ二人乃
妹へ孝もあり貞もあり。彼等小ちうて年來の懲念と。今一時小轉
て。善か到一此自殺。さうして名告て出。懺悔小罪を滅べく
死神を。さて未來へとまとうと。云終て於閑小むすへ。これ妹今更て

兄弟の縁と断へぞ。さん露助。於閑へ我と兄弟を。移がひ下の
名へ汚す。りゆ如くふ連そひれよ。又別ふりふとあり。奪へるかの
千両の半へ其修船岡村の我隱家み残へ。和主とそかのあん
館へ返へられよ。あらわとき残へて刀ふ手と鍔をうちと引まわせを。
於閑苦痛と見る堪。悲歎の涙ふむせくる。まも強氣の堂左衛門
刀と投捨かの土壇へ這寄て。さう我襟髪とくさあげり。りざく
餘字兵衛と。軍用金の盜賊と成敗へて。がん水のあらと立く
打れがん義理出来。立とくじて懷ふ入窮鳥と手に立ち。おひへ
きくね世の捉へせんとぞ。南無阿弥陀仏と声りやも。首打かとも。
於閑へ軀へもうつきて。声と放て泣きり。老母淀瀬も露助も暗く

落涙もろき。かくて餘字兵衛堂左衛門の首と取上で露助對我此首と受けもあしんを海なみの首の質物しつものへ其役返へりかえし。つゝとなはてとその質物の証書と投与へ前程返せ。此五十両の金へ堂左衛門にゆうの料あらわふつゝとそ。金の包と於關おさと小桶おとう小載のせて母の前まへふさはー出はし。りき軍用彼小柄のこぎの小刀をさーつめき。首桶おとう小載のせて母の前まへふさはー出はし。りき軍用金の盜賊の首くびをん受取うけとりしてまごべーとつて。老母おやぢへうち點頭てんとう此首このくびを受けとれた。我うけとまる役目わざめも。彼志あいしの次つづく五月雨さつき。汝なら着きる濡衣ぬれいも今ねいま捨すてあきらかうと喜うれば餘字兵衛まこと露助あらすけも。我曾まことにて剃髮ひげの望のぞむらとくじくじ。都つゝが為ため小打こだべき心こころあり。やゑやゑまいまざこれと遂とげど。今汝なら刀と鑄つくり誓ちかくとまう。さりそ都つゝが恨うらみをもとさん。田人たにんの家督けいとの儀ぎハ餘吾よし郎らう小續つづりとま。

拙者わざわざふへ剃髮ひげとあん免めんーとまうやうに父ちちふかみてとひりのく露あゆ助あらすけ刀とそ髻きりとまうも。今ういま祖父そぶの法名がな淨閑じょうかん乃の一字をといて山咲さんざい窓閑まどかんと名なと更かめ。神祇じんき秋あき教戀きょうれん無常むじょうと狂言きょうげん綺語きごと。うううて詠諧よひの連歌れんかとよ一派いっぴとあくと讀佛とうぶつ無むの因いんとくくて。都つゝ菩提ぼだいののあふをとととと終まつて。片手て手て燭ろう片手て手て小こ手て燭ろう片手て手て小こ手て斬きする髻きりと握いて。庭下駄ていげたと踏ふききて。龜石かめいしでのふ池いけの花はな搖動ようどうと。一道いつせいの炎火門ほの門と。池水皺いけみずしわと愁うれ如ごく。忽紫燕おもろいしわんの花はな搖動ようどうと。一道いつせいの炎火門ほの門と。不圓ふえんと。嗚呼うめき病びやくふうやまうやまて我わ家いえ。見てまうをうう不ふ衰あせま。

窓閑まどかん姿すがたと見みればばかかつを

と口くちをまう。再入一陳いちじんの風ふうからー来て。庭木ていもくの梢えさしと吹ふきし。池水皺いけみずしわと愁うれ如ごく。忽紫燕おもろいしわんの花はな搖動ようどうと。一道いつせいの炎火門ほの門と。燃上のこりあれた。手燭ろうと撲地うつじ取とかと。又またかかひ出だと瘞うずき病びやくに。身上じょうじょう

まき足軟て。うち倭僕と踏もあつ。吐息えも苦げ。炎火よしひ
のまんとそれど夏の澤水

とたうふ服をと吟ド。恨として成仏せよ。南無阿弥陀仏と
えりへて。手不持る髪と池水小投へと。又葵子花やくと動て
花の裏より紫雲と生ド。靈體とて空ふとみびき。一羽の時鳥起
出て。一声鳴ワ光と放て西の空ふを去ぬ。此時窓閑ダ胸中忽朗
ふきりて。病ハ頓小癒。是都ダ怨靈窓閑ダ一夕の妙小感伏。
恨とをして得脱。成仏するふ疑タと露助於闇愁ひの中より
喜びと交え。鬼神の心とも感ぜらるゝとぞひを。窓閑又母ふむし。おん聞やふもひ。主君判官の侍私藏小二振
の剣あり。其一振ハ小鳥ふうせくて朝鳥と名。日中乃跋

鳥ふことじて陽の太刀。今一振ハ此蛙鳴丸。さてと月中の
蟾蜍ふことじて陰の太刀。おのれ少年の時主右より辨領の劍（左）を
と。が姿を以て隠者とされど用べき所。これと餘吾郎小づく
されさせられしとくひてさり出せ。母へ益感歎も。やる折ノも門外小
ちん迎ひとよび。淀瀬が從者等提燈把て来アれど老母の
首桶と蛙鳴丸と携て立上。我ハ一旦旅宿（左）を取。老母へ
まづくと歩出て。兼物ふうりを。窓閑露助於闇もとと小門
おこう。此時露助南方十字兵衛（左）忠死のことと語らざるハれど
語。まば十字兵衛（左）失理。わればきぐ。まづ小短夜
されば。や曉ふ近う。夜の明け間と窓閑。露助於闇（左）下知
とす。空櫻と假の棺もとて。堂左衛門（左）軀をもたら。林びれす。

二人の僕どもび醒して擔一ひれを露助夫婦へ左右ふそへ鳥辺
野にて出去ぬ。窓闇へ其跡と見えり。

袖白妙の外の花の雪の夜もあらかとあるあらの朝紫の
杜若の花も惜の心ひりて。今こそ草木國土をもや今こそ
草木國土。悉皆成仏の沙法と得てこそ。失ふべれ

と謡曲杜若の切とぞうりて、歎息して一間の裏ふ入ふたり。時又池の
わらじ簾ヒと音一きり。葵子花のゑりわひする。裏もん衣服へ更
きり。覆面頭巾。丸縫の帶。手覆裏脚ふ至まを。都て一樣の紫と
打扮するものびの曲者あられ出て四辺とうひび抜足一ツ。亭坐
敷ふのびゆきそ。彼處ふあう一朱塗の手箱と奪取身と轉じて
出んと。窓闇へ奥の間うち出来。卫これと見つけて呼灰せし。曲者へ刀を

抜て斬り下す。窓闇へ身とり引りて。手を手刀へ打落。朱塗
の箱と取灰と。腕袖上つ唯一言紫の朱と。ふと少びともひて
引きを乞け。時さらまち鳥鳴て夜いかのぐと明るまし。此曲者の謂
うが小彼箱の裏うへいふる物とよ。六の巻ふをすて詳き

雙蝶記卷之四終



